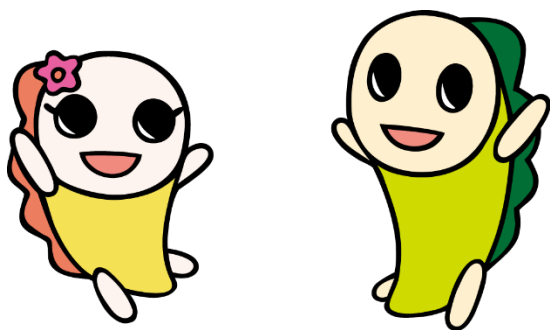


中高生世代で語ってみよう！ ワークショップ 「コロナ禍と子どもの権利」

実施報告書



令和5年9月

杉並区



1. 事業概要

(1) 実施目的

- 杉並区基本構想の子ども分野に掲げた目標「すべての子どもが、自分らしく生きていくことができるまち」の実現に向けて、「(仮称)杉並区子どもの権利に関する条例」の制定を見据えた取組を進めるに当たり、子どもからの意見を幅広く聴くことを目的として、こども基本法第11条に基づく意見表明の機会の一つとして当ワークショップを実施しました。
- 区立小学校・中学校については、同時期に別途意見交換会を行っていたことから、今回のワークショップの対象者は中高生世代としました。



(2) 概要

①日時：令和5年8月26日（土） 午前10時から午後0時30分まで

②会場：杉並区役所 本庁舎 西棟 6階 第5・6会議室

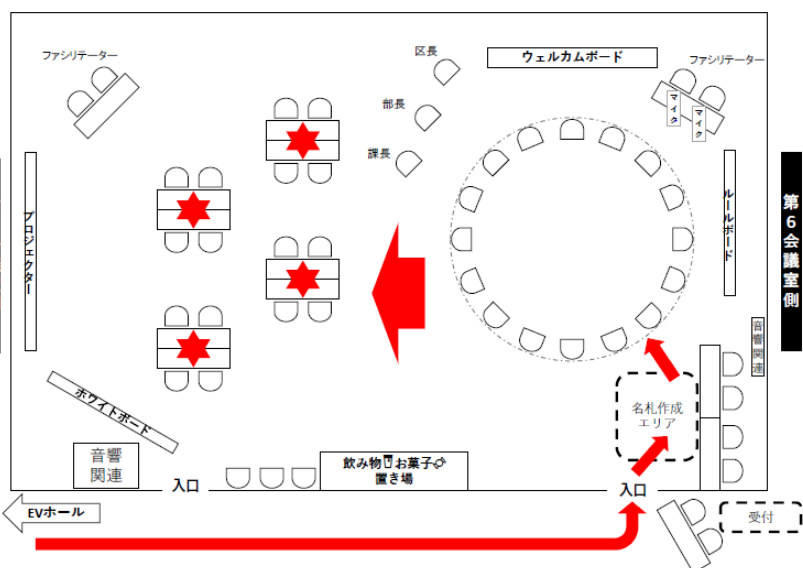
③参加人数：計15名（内訳は下記のとおり）※学年は令和5年8月現在

	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
参加者	5	2	6	2	0	0	15

④講師・ファシリテーター：工学院大学教授 安部芳絵先生（あべさん）
（協力：東京経済大学教授 野村武司先生（のむさん））

※本報告書では、ワークショップ当日に使用したニックネームで記載しています。

(3) 会場レイアウト



会場は大きく2つのスペースに分け、進行に合わせて使用しました。話をしやすい雰囲気づくりのためにレイアウトを工夫しました。

右側はイスをサークル形式に並べ、受付後、参加した皆さんは好きな席に向き合って座りました。

アイスブレイク終了後は、各自好きな飲み物をコップに入れてから左側のグループ席に移動しました。

各グループ席にはお菓子やワークショップに使用する画用紙や筆記用具等を用意しました。



2. 当日の流れ

① 受付・名札作成

- 受付後、今日自分が呼ばれたい名前で名札を作成しました。ファシリテーターや事務局を含め、ワークショップ中は名札の名前で呼び合いました。
- サークル形式の席に座り、開始までの間、おしゃべりをしながら待ちました。初対面で緊張感がある中、のむさんを中心に学年や住んでいる地域など、話しをすることで徐々にリラックスした雰囲気となりました。



ワークショップ開始！

② 区長挨拶とルール説明

- 岸本区長がワークショップの趣旨と「子どもとともに」取組を考えていくために、たくさんの子どもの意見を聴いていきたいと挨拶をしました。
- ファシリテーターのあべさんからワークショップの参加にあたり、ルールの説明がありました。
 - ・ここでは何を話しても間違いではありません
 - ・言いたくないことは無理に言わなくてOK
 - ・ここで聴いたことは秘密にしてね
- 子どもの権利に詳しいのむさんから、子どもの権利に関する世界や日本の動きについて話がありました。



③ アイスブレイクとグループ形成

- 参加者のアイスブレイクとして、バースデーラインを行いました。声を出さずに合図を送り、区長や事務局を含めた全員が1月1日から12月31日まで誕生日順に列に並ぶことができました！！全員で協力して成功させたことにより、一気に打ち解けた雰囲気になりました。
- 続いて、自分にはない面をもっていそうな子と2人組になり、2分で自己紹介をしました。その後、2人の共通点を見つけ、自分たちと似ていそうな2人組と合流して、4人のグループを4つ作りました。他己紹介をして仲を深め、グループごとの席に移動しました。
- 欠席者1名の代わりに事務局職員のはなちゃんがグループに参加しました。その他のグループにも一人ずつ、各グループのサポート役として、協力者のむさん、事務局職員のすぐる、ポビーが参加しました。



④ ワークショップ（お菓子を食べながら）

1. コロナ禍の気持ち

- 「コロナ禍のあなたの気持ちを漢字一文字であらわすと？」というあべさんの問いに対して、1人1枚、画用紙に漢字を書きました。すぐに思いついた子、悩みながら書いた子がいました。その漢字を選んだ理由をグループ内で発表しました。
- ホワイトボードに全員の漢字を書いた画用紙を貼り、それぞれの思いを共有しました。特に気になる漢字を書いた子にその理由を聞きました。（➡5・6ページ参照）



2. コロナ禍の子どもの声

- 「新型コロナウイルス感染症とはなにか」、感染症の歴史やコロナ禍における世界の子どもたちの状況をあべさんの講義により確認しました。公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン「子どもの声・気持ちをきかせてください！」2020年3月17日～31日の調査結果をもとに、印象に残った声を話し合いました。コロナ禍での子どもたちの状況を振り返った後に、「自分はこうだった」、「これが嫌だった」、「これが良かった」、「大人や社会にこうしてほしい」など、自身の経験や感じたことをグループ内で共有し、意見をまとめました。その後、全体発表を行い、コロナ禍で子どもたちがおかれていた環境を改めて考え直しました。（➡7・8ページ参照）



あべさん説明スライド抜粋

子どもに一番よいことは誰が決めるの？

※子どもに一番よいこと（第3条 子どもの最善の利益）を

誰が決めるのか？

条約採択前：おとなが決めていた

条約採択後：子どもの声を聴いて、子どもと共に決める

（第12条 子どもの意見の尊重）

→子ども基本法

子ども基本法と子どもの意見

（子ども施策に対する子ども等の意見の反映）

第十一条 国及び地方公共団体は、子ども施策を策定し、実施し、及び評価するに当たっては、当該子ども施策の対象となる子ども又は子どもを養育する者その他の関係者の意見を反映させるために必要な措置を講ずるものとする。

杉並区も、子どもの声を区政に反映しようとしています

3. コロナ禍を子どもの権利の視点で考えると？

- 子どもの権利に関する知識として、「国連子どもの権利条約」「子ども基本法」から「子どもにとって一番よいこと」、「子どもの意見」についてあべさんから説明がありました。「子どもの声を聴いて区政に反映するって例えばどんな感じ？」をテーマとして、コロナ禍における世界の首相・閣僚による子ども向け記者会見の事例紹介がありました。こうしたメッセージは、「社会を担うパートナーとして子どもを捉えていることの現れ」だと知ることができました。
- 杉並区でも、「子どもの意見」を大切にし、子どもをパートナーとして一緒に考えていきたい！という想いがあることを子どもたちに伝えました。

4. 杉並区に伝えたいこと（各グループからの発表）

- 杉並区でも子どもの意見を大切にしていきたいという思いを受けて、杉並区で「〇〇してみたい!」「〇〇してほしい!」など、「杉並区に伝えたいこと」を考えました。グループ内で意見交換をした後、子ども家庭部長の山ちゃん、子ども政策担当課長ゆうじの前で、それぞれの言葉で全体発表を行いました。「すぐに動いてください!」と切実な意見がありました。（→10・11ページ参照）



⑤ 講評 子ども家庭部長（山ちゃん）

- 発表を受け、子ども家庭部長の山ちゃんから講評がありました。区では、子どもたちの声を直接聴いて、それがこうなったよと伝えることに真剣に取り組んでいること、発表にあった児童館や中高校生の居場所についても、皆さんの意見を聴きながら考えていくために、これからも今日のような場を続けていきたいという話がありました。

⑥ 記念撮影・参加記念品贈呈

最後に参加したみんなで記念撮影をしました!



参加記念品として、参加証明書と杉並区内共通商品券（2000円分）を贈呈しました。



3. グループで出た意見

1. コロナ禍の気持ち

(⇒3ページ参照：☆特に気になる漢字として理由を発表しました)

「コロナ禍のあなたの気持ちを漢字一文字であらわすと？」

■ 「得」

- 学校が休めてうれしかった。友達と会えなくて寂しい気持ちもあったけれど、姉がいるから遊び相手や話し相手には困らなかった。ステイホーム中、いろいろなテレビゲームをして楽しかった。

■ 「無」

- 人とあたり出かけたりすることができなかったけどいやな気持ちにはならなかった。人と会わないから自分の身の回りでの変化がなく、とくにこれといった記憶に残る出来事もなかった。

■ 「壊」

- 様々なイベントが中止となり本来であれば思い出となる物事が壊された期間だった。もともと友達が多い方ではないが、自由気ままに話すことができなかったのが本当の友達と呼べるような関係性を周囲と築くことができなかった。

■ 「歌」☆

- 様々なイベントが中止されるなか、学校行事で唯一開催されたのが合唱コンクールだった。元々歌が好きなのでこの行事だけでも開催されてよかった。

■ 「終」

- コロナになって予定していた行事などがなくなり、「終わった」という気持ちになった。やりたいことができなくなったし、この先どうしたらいいかわからなくなった感じがした。

■ 「乱」

- 学校が休校になり、オンライン授業などになったが、生活習慣が変わり、夜遅くまで起きて、朝寝坊をするなど生活や気持ちが乱れたと感じた。

■ 「難」

- 学校に行かなくなり、オンライン授業もなく、家にいる時間が増えたりして、自分にとって難しい時期だった。

■ 「窮」

- 色々なことが制限されて窮屈だった。

■ 「楽」

- オンライン授業とか、色々「楽」になった面もあった。



■ 「開」 ☆

- 新しい生活様式になり、オンラインで今までとは違う世界の人とつながれたりしたこともあり、世界が開けた。

■ 「寂」

- 友達と会えずにさみしい思いをした。

■ 「暇」

- 学校でクラス替えがあったが、あったことのない人もいてともだちになれなかった。家にずっといて、ネットでYouTube等をずっと見ており、やることなく暇だった。勉強も進まなかった。

■ 「迷」

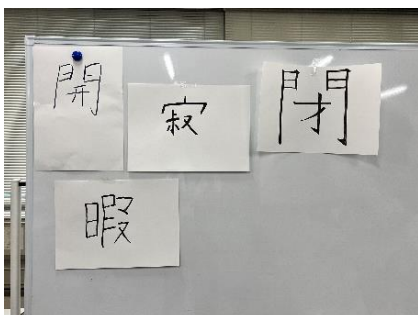
- 今まで、学校や家で何をするか言われてやっていたが、それがなくなり、自分から何かをすることができず、何をやっていいかわからず迷った。何やってるんだろうという気持ちになった。

■ 「閉」 ☆

- 複数の小学校と中学校が合併になり、これまでの友だちにも会えなくなった。新しい友だちを作ろうと思わなくなり、心を閉ざした。コミュニケーション力が下がり、引きこもりのようになった。

■ 「何」

- 急に閉鎖になり、「なんで？」と思った。体力も落ちた。



2. コロナ禍の子どもの声 (→3ページ参照)

➤ 生活

■ 運動不足

- 外出する機会が減り、運動不足となり筋力の低下を感じた。
- 身体を動かして遊びたいのに、児童館や学校で遊ぶことができず他に遊べる場所もなかった。
- 学校に行かないと体育も部活もないから運動不足になった。
- 運動しなくなり筋力が落ち、学校の階段を上るのに息が切れてやばいと思った。
- 目の前のものに手を出して食べるので太った。気にはなったが食べるのを辞めたわけではない。

■ 運動するようになった

- 母親と一緒に毎日8キロのジョギングをするようになった。最初は嫌だったが楽しくなり、目的地の井の頭公園に行くと、懸垂やら体操をしている高齢者がいて、年上の人との会話も楽しかった。
- 学校が休みの間、山梨でペンションを営んでいる祖母のところに行った。周りが山なのでむしろ普段より運動ができた。山梨にいたから逆に運動できた。

■ 料理がうまくなった

- 家にいる時間が長くなり、自分で食事を用意することも増えたので料理がうまくなった。生活力が上がった。

■ 生活リズム

- 生活のリズムが乱れ、眠れなくなった。目が悪くなった。

■ スマホでの会話

- スマホでの会話になれてしまい、実際にあって話すことができなくなっていた。

■ マスク

- マスクをすることが日常になり、マスクを外せなくなった。食事をするときもマスクをめぐって食べていて、顔を見られないようにしている。顔を見せるのが恥ずかしい。外したくない。いまさらはずせない。マスクをしている方がきれいに見られる。男子は割とマスクを外しているが、女子は外さない子が多い。それでもマスクを外す人が増えてきて、マスクをするのが少数派になっているのが嫌だ。
- マスクを外すタイミングが難しく、夏休みの終わりをタイミングに外すこととした。
- 人によってマスクのルールが異なるので何が正解なのかわからない。クラスでも「マスクする派」と「マスク外す派」に別れて言い争っている場面がある。マスク着用について「個人の判断」ではなく、基準やルールが欲しい。
- マスクしてると、顔を知らない友達がいる。類型の見直し後もマスクを外したがない友達も多く、ずっと顔を見たことがない友達もいる。

■ 同調圧力

- マスク着用の有無、手洗いうがい、行動等々、普段以上に同調圧力を感じた。

➤ 家族

■ パパ・ママに休みをあげてほしい

- ・ 仕事が忙しい上に、子どもが家にいるから家事もいつも以上に大変そうだった。学校は休業になったけど仕事はそうならなかった。

■ 妹と性格が合わず、家にいる時間が増えるとケンカが増えた。

- ・ 一緒にいる時間が長くなるとトラブルが増える。お互いにイライラしている。

■ いい親の下で育った子ほどダメになりそう

- ・ 「いい親」と呼ばれる何でもできる親の下で育つと、自分では何もやらなくて生活力が身につかなくなりそう。

➤ 学校

■ 黙食

- ・ 給食時の黙食がつかった。話していると先生に注意される。注意されても話し続ける生徒もいるがそういう時は先生がきつく怒るときもある。そういう時の先生はかなり怖い。

■ 早く学校に行きたい

- ・ 友達に会いたいと思っていたが、外で友達に会うこともダメとされていた。

■ オンライン授業

- ・ オンラインで授業を受けることに慣れていたため、先生に直接会うことが嫌だった。制服を着て学校に行くことが面倒に感じるようになった。

■ 学校行事

- ・ 卒業式、閉校式が残念で辛かった。在校生が出席できなかった。1/2成人式もなかった。規模を縮小してでもやってほしかった。仲のいい先輩をちゃんと送りたいのに、いつもとは違って卒業式に出席できなかったのが残念だった。
- ・ 宿泊行事がなくなった。楽しみにしていた宿泊行事がなくなってしまい、思い出作りができなかった。

➤ 友人関係

■ 本当の友達

- ・ 「話したり」、「遊ぶこと」が制約されていたので「本当の友達」といえる人がいない。普段話している周りの人も、友達というよりクラスメートという関係性で本当に自分が思っていることを話せる相手がない。

■ 友達といっしょに遊びたい

- ・ コロナ禍で分散登校となり、クラス内で出席番号の偶数と奇数で分かれて登校していた。番号が違うと仲の良い友達と数カ月間会うことができなかった。

■ LINEグループ

- ・ LINEを持っている人といない人がおり、持っている人同士の会話についていけなかったり、入れてもらえなかった。LINEグループに属している人はますます仲がよくなったが、持っていない人は疎外感を感じた。LINE上のいざこざがあり、何があったか聞こうとしたところ、部外者は知らなくていいといわれた。スマホなんてない方がよい。



➤ 情報

■ 大人扱い

- コロナ禍に限った話ではないが、都合のいい時だけ大人扱いされて本当に困る。まだまだ分からないことや大人に頼っていきたいのに「もう大人なんだから」と言われると何にも言い返せなくなる。変に大人扱いされるくらいなら子ども扱いのままがいい。

■ 情報提供

- 学級閉鎖や休校になる際に突然言われたのが嫌だった。何人欠席になったらなどの基準を事前に知らせてもらえると状況がわかり、納得できたはず。

■ いつまで続くのかわからなかった

- 緊急事態宣言が出た後、2月～5月頃まで休校になったが、当時はいつ学校が再開するのかかわからないまま過ごすのが辛かった。宿題をいっぱい出されたが、いつまでにやればいいのかもよくわからなかった。やる気も出なかった。

■ コロナ対策の不備について意見を聞かれなかったのが嫌だった。

- 大人たちが勝手に決めた規則に縛られて、自分たちがどう思っているか聞かれなかったのが不満。

➤ 地域

■ 子ども食堂で地域の人達と関わっていたけど弁当配布になって居場所がなくなった。

- 地域で開かれている子ども食堂で普段は色々な年代の人と関わっているが、弁当の配布になってしまったので交流ができなくなった。

➤ その他

■ コロナ禍で気づいたこと

- 小さいころからピアノを習っていたが、コロナ禍でピアノ教室に行けなくなり、ピアノができない時期があった。コロナ禍の後、ピアノや歌うことができるようになり、その楽しさに改めて気づかされた。好きなことができるありがたさを感じ、よりがんばろうと思えた。

■ 新しい文化に触れた。

- コロナによって新しい文化も生まれた。時間があつたので今まで手を出さなかった韓流の音楽を聴くようになってハマった。



4. 杉並区に伝えたいこと

杉並区で「〇〇してみたい!」「〇〇してほしい!」など、それぞれが「杉並区に伝えたいこと」を考えました。グループ内で意見交換をした後、子ども家庭部長（山ちゃん）、子ども政策担当課長（ゆうじ）に向けて、全体発表を行いました。（→4ページ参照）

➤ 居場所

■ 遊ぶ場所

- ・ 児童館の建物を無くして、その機能が学校内に設けられているが同じように遊べない。具体的には体育館が開放されているのだがママさんバレーと分けて使うことが多く従来遊びに使えていたスペースよりかなり狭い。子どもがギュウギュウになって遊んでいる。
- ・ 児童館がなくなるときは、なくなるという事実を知らされるだけで理由説明などが行われず納得することもできないまま行われた。
- ・ 「子ども子育てプラザ」という名前だとある程度の年齢がいくと使いづらい。また場所も不便で使いづらい。

■ 自由にできる場所

- ・ ボール遊びやたばこなどが禁止される場所があることはわかるが、OKなところも残してほしい。

■ ソフトテニスができる場所がほしい

- ・ 土のグラウンドなどなんでもできるスペースが必要なのもわかるが、ソフトテニスの練習ができる場所もほしい。現在は学校で練習をしているが、硬式テニス部も使用するので、練習時間が限られる。児童館の体育館などは年齢制限があり自由に使用することができない。

➤ 学校

■ 学級閉鎖のルール

- ・ 突然学校が休みになると伝えられたため、その理由を教えてほしかった。クラスの何人が欠席したらなど、子どもにもわかるようにきちんと伝えてほしかった。説明してくれた納得できる。

■ 生徒と教師の格差

- ・ 教師の方が立場が圧倒的に上だと感じている。敬語を使うことで、距離を感じるし、言いたいことが言えないことがある。
- ・ 先生のことはあまり好きではない。学校に行くのは友達に会うため。
- ・ 外部講師をもっと増やしてほしい。経験や学校以外の知識を持っている人だと学ぶことも多く、対等な関係を築けそう。

■ 校則など

- ・ 生徒が納得できていないものがある。生徒が決めるといっても生徒会や代表委員などの一部の生徒のみ。



➤ コロナ禍のあと

■ マスク対立

- 地域や学校、家庭内でもマスクを「着ける・着けない」の対立がある。人によってマスクのルールが異なるので子どもは振り回されている。大人同士でもマスクに関するルールを個人任せではなく明確にしてほしい、できないのであればマスク着用の基準を設けてほしい。

■ イベントについて

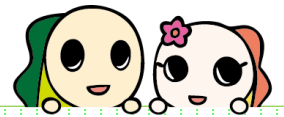
- コロナ禍で多くのイベントが中止となった。その中には本来思い出となるべきものも含まれており、イベントが中止となると同時に思い出も失った。感染症が流行していて仕方がないということも理解できる。今後またこういった形で中止とするのであれば、思い出がないということを引きずることがないように無くなった分の補填をしてほしい。

➤ 夢

■ 座・高円寺の舞台に立ちたい！

- 中野区のプロジェクトに所属しているが、杉並区でも舞台に立ちたい。団体などに所属していなくても発表ができる場が身近にあると良い。ピアノや歌を披露したい。



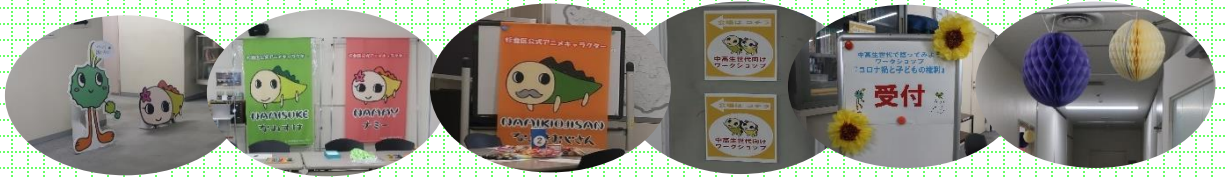


事務局職員の振り返り

子どもたちがリラックスできるようなワークショップとするために、下記の工夫を行いました。当日は子どもたちへの積極的な声かけや、職員も楽しむことを心がけました。

会場装飾・・・区役所内の会議室を、明るく楽しそうな雰囲気になるよう装飾をしました。

- ✓ 区の公式キャラクターなみすけたちのスタンドパネルやタペストリー
- ✓ 実施した季節（夏）からイメージした「ひまわり」を共通モチーフとして使用
- ✓ 入口や廊下に吊り下げ式のポンポン飾り



お菓子と飲み物・・・事前アンケートで子どもたちに希望を聞いて、グループワークの合間につまめるお菓子や飲み物を用意しました。全ての種類を揃えるのに苦労しましたが、自分がリクエストしたものがある！と喜んでもらえて嬉しかったです。グループでの会話のきっかけにもなっていました。



ニックネーム・・・大人を含む参加者みんなが自分でつけたニックネームで呼び合うことで、大人も子どもも対等な関係で、親しみをこめて話しかけやすくなり、とてもよかったです。「〇〇さん」より、自分らしく呼ばれているように感じることができました。

BGM・・・ワークショップ開始までの間、会場に流行りの音楽を流しました。「みんなはどんな曲を聴いているのかな？どんな曲が人気なのかな？」と選曲に悩みました。

カジュアルな服装・・・職員全員、私服で参加しました。夏らしい短パン、ミリタリーファッションなど、個性を活かした服装は、子どもたちにも親しみやすく感じてもらえたようです。

中高校生世代で語ってみよう！
ワークショップ「コロナ禍と子どもの権利」
実施報告書



令和5年9月

杉並区 子ども家庭部子ども政策担当課
東京都杉並区阿佐谷南1-15-1 TEL 03-3312-2111

